

《 7,8合併号からこのテーマで連載しています。》

家族の一員になった子犬はあっと言う間に頼もしい成犬に育った。一人で遊べる珍しい犬だった。庭に出て、遠くに流れる雲をいつまでも見つめて時間を過ごしたこともあった。また自分のお気に入りのボールをくわえ、中に放り上げ、そのボールを壁と背中に挟んで受け取り、背中の上のボールをバランスを取りながら落とさないように遊んでいることもあった。数歩だけ助走をつけ、壁を使って跳躍し、50センチほどの体長なのに、2.5メートルの壁を乗り越えようとしたり、元気一杯の犬にそだった。その頃になると運動能力ではるかに劣る子供たちは、完全に彼の乾分に思われていたようだ。しかし人に危害を与えるような犬には育たなかった。一度だけ、まだ幼犬時代に下の子供が好奇心から犬の食事中に餌入れに手を入れたときだけ、その手を口にくわえたことがあるが、決して噛み付こうとはせず、威嚇行為だけをしたことがあった。もちろん悪いのは子供なのだが、その前に激しく子犬を諷めた。簡単に言うと「しばき倒した」。それ以降、どんなときでも人には危害を与えるそぶりもなかった。もちろん、子犬同様大目玉を子供がもらったのは当然のことなのだが。骨付き肉をしゃぶり食べているときに近寄ると、警戒の色を深め、威嚇のうなり声を上げたことが一度あった。とても当たり前の行為なのだが、自分の犬もそのような野生的な部分が残っているとは思わなかった私は驚きを感じた。そんな犬にも苦手なものがあり、一つは雷、もう一つは小さい子供だった。雷や花火が鳴り始めると、尾っぽを丸め、二階の浴室の端っこに丸まって、その災難が収まるまで静かに待っていた。ある時は突然の花火の連発に驚き、わたしのベッドの上にお漏らしをしてしまったこともある。もう一つの犬にとっての災難は小さい子供。小さい子供が家に来ると、「頼むからどないかしてえなあ、大将」という表情となり、それでもきちっと座らされていた。小さい子供はぬいぐるみの相手をするように、犬の耳や体や尾っぽを引っ張ったりするのだが、その間犬は私や妻の方に助けを求めるような視線を送りながらも、じっと小さい子供達の玩具扱いを我慢していた。「大将、ほんまになんとかしてえなあ」という視線が続くと、すぐに逃げ場になる庭への扉を開いて救ってやった。長々と庭で暇つぶしをし、戻ってきて小さい子供がいないことを確認すると、「ほんまに大変やったんやでえ、ちょっとは僕のこと褒めたりいな」と言うようにじゃれ付いてきた。「ごめんごめん、よう頑張ったな」と言いながら、全身を愛撫してやったことが何度もあった。散歩に連れて行き、芝生の公園に人影がないとき、リードを離して思いっきり走らせてやるのがしばしばあった。頭を低くさげ、尾っぽでカーブのバランスを取りながら曲がり、雑種であるのに、猟犬のごとく放たれた矢のように公園を走り回った。存分に走り回っただろうと思い、ハーネスを付けるために捕まえようとする、いつも私の目の前で方向を変え、「捕まらないよお！」という表情で駆け抜けていた。子供が大きくなったある日、目の前の交通量の多いリンクの向こう側の公園へ、子供二人が自転車に乗って犬の散歩に連れていった。私たち夫婦は家で留守番。すると、どうしても家の扉の前に動物が息せき切って呼吸を荒げているような音が聞こえた。私たちはすぐに扉を開けると、そこには何もいなかった。「おかしいね、確かに犬が家の前に戻ってきたような気がしたね」と言いながら暫く待つと、子供達が散歩から帰って来た。「あのね、途中で犬が見えなくなったの。一生懸命犬の名前を呼んだんだけど、姿が見えなくなったの。すごく心配になって、大声で名前を呼ぶと、どこからか戻ってきたの。それでしっかりハーネスに繋いで帰ってきたの」。驚いた報告。交通量の多いモンスのリンクを、どうやって無事に往復したのか、とても不思議な話だった。そんな逸話をたくさん残した犬にも老いがやってきた。初めは飛び越えようとした小さな段に躓き、自分でも「おかしいなあ、そんなはずはないんやけど」という表情を繰り返していたが、それが実は肉体が老い始め思ったように体が動いていないことを示していたのだった。じっと目を見つめると薄っすらとその瞳に白色がかかり、老化現象を顕著に表せていた。しかし日常生活はいつもと変わりなく、変わったところは昼寝の時間が長くなった程度の変化しか見せなかった。散歩に連れて行くと、以前のようなスピードは出せないが、それでも私が追いつくことができないほどの速さで疾走し、元気のよさを見せ付けていた。恐らくしんどかったのであろうが、そんな素振りを微塵も見せず、我が家の愛犬として、そして番犬として生活を続けていた。

(注意 この文章内の「犬」は私たちの飼い犬のことです)

《つづく》